

第4回優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「ネコチャンプーのぼうけん」

福島県 光南高等学校 二年 矢吹優衣



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞／銀の星賞

『ネコシャンプーのぼうけん』

福島県 光南高等学校二年 矢吹 優衣

ぼくのおにいちゃんはいじわるだ。たったにさいちがうだけなのに、いつもいぼっている。なにかわるいことをすればみんなぼくのせい。ちよつとはんこうするとあたまをごっつん！

ぼくがどんなにがんばっても、おにいちゃんにはかてないんだ。ぼくをなかせるために、あれこれといるんなイタズラをしかける。このあいだはぼくのかわいがっているぎんいろネコのシュシュに、えのぐできいろのトラもようをかいた。かわいそうなシュシュは、ぼくのベットのううえでふてくされてねむっていた。そのあとぼくはなきながらえのぐをあらいおとしたんだけれど、ママにどんなにもんくをいっても、おにいちゃんがやったとはしんじてくれなかったんだ。

なんととっても、おにいちゃんはゆうとうせいだから。がつこうでもおうちでも、みんなにたいしてはいつでもいいこ。ママのいうことはちゃんとときくし、べんきようだっていちばんできる。できないことなんてなにもない、おにいちゃんはそういう。でもぼくはおにいちゃんのものしようをしってる。イタズラだいすきでいじめっこ。まじめなんかじゃないんだ。

けどぼくはまだようちえんでせもチビだしあしもおそい。いちおうなんでもできるつもりだけど、やっぱりおにいちゃんにはなにひとつかなわないんだ。そしていつだってわるいのもくるしむのもぼくだった。このごろはママにもんくをいってもむだなのがわかったから、ただがまんしているだけ。こんなのはもういやだ。なんとかしておにいちゃんをみかえしてやらないと！ぼくはそうけっしんした。

おにいちゃんをなかせてしまおう。

そうはおもうんだけど、けつきよくなにもいいかんがえがうかばない。そしてきょうもまたおにいちゃんのひどいイタズラにひっかかってしまった。



「まあ！なんてかっこうなのハル、いったいなにをやらかしてきたの！？」
ママがひめいをあげた。ぼくのむぎんすがたにかおをまっさおにしてら
んでいる。ぼくはぬれたかみをはらいながら、ただだまってうつむいていた。
「……いけにおちた」

「どうしていけにおちるのよ？ あなたもうごさいなのよ、しっかりしない
とあぶないでしょ」

ママはあきれたようにためいきをついて、ぼくのびしょぬれのあたまをツン、
とついた。ぼくはほんとうのことをいいつけてやりたかったけど、どうせし
んじてくれないのがまんする。ぼくってなんてかわいそうなんだろう。

「さあさあ、はやくお風呂にはいつてきれいにして。ふくはせんたくきのなか。
タオルはおいてあるわ」

はやくちでいうと、ぼくをバスルームにいくようにうながす。キッチンでは
ママのつくっているマフィンのきじが、とちゅうのままになっていた。おか
しづくりがママのいちばんのしゅみだ。

これじゃあぼくのぶんのマフィンは、ひとつへるだろうな……。そんな
ことをかんがえながら、しぶしぶとバスルームにむかう。どろとみずくさで
よごれたシャツとズボンをぬぎ、せんたくきにはうりこむ。くつしたがぬれ
ていきもちわるい。

「なんでぼくがこんなめにあわなくちゃいけないんだ……。わるいのはお
にいちゃんじゃないか」ひとりでブツブツもんくをいうけど、だれにもきい
てもらえないのがくやしい。このいきばのないイライラは、いまにもバクハ
ツしそうだった。

せつけんのしろいあわが、ふわふわとぶ。ようやくいけのおいがとれ
てからだもきれいになった。からだもポカポカしてあったかい。やつときも
ちがらくになった。

「おにいちゃんめ、ぜったいにやつつけてやるんだから……」
あわだらけのタオルをにぎりしめて、ぼくはじぶんにいきかせた。でもど
んなにいきごんでもほかのひとにきいてもらえないんじゃ、いみがない。ぼ



くのイライラはこうやってひとりできるときにもんくをいうことで、なんとかおさまっている。でももうげんかいだ。パパがまえにストレスをためすぎると、かみのけがぬけちゃうっていつていた。もしかしたらぼくも、おじいちゃんみたいにツルツルあたまになっちゃうかもしれない。らいねんにはしようがっこうにいくっていうのに、そんなたいへんなことになったらどうしよう！ ぼくのせなかグズワーツとした。それだけはぜったいいやだ。ぼくはいっこくもはやく、このイライラときようならしないと。

きぶんをひきしめるために、シャワーのおんどをつめたくしてからだじゅうのあわをながす。つめたいけどきもちいい。そしてかみのけをあらうために、みずいろのシャンプーハットをかぶった。はずかしいことにぼくはまだこれなしではあたまがあらえない。おにいちゃんにからかわれるけど、ほんとうのことなのでなにもいいかえせない。これなしでもへいきになれるように、れんしゅうしなくちゃ。

ぼくはバスルームのでっぱったところにおいてある、ピンクのシャンプーボトルにてをのばす。

ぼくのだいすきなかおりがするんだ。

おかしなことにきがついたのは、あたまをあわでいっばいにしてからだった。なにげなくあらっていたけれど、なにかがへんだ。このかおりはぼくのすきなスズランのかおりじゃなく、スツキシタリンゴのかおり。どこかでかいだことのあるかおり。

「ああっ！ シュシュのにおいじゃないか！」

そう、これはぼくがだいじにしているネコのシュシュがつかっている、ネコよのシャンプーだ！

ぼくはびっくりしすぎて、しばらくうごけなくなってしまった。どうしていつものシャンプーボトルのなかみが、ネコようシャンプーにかわっているんだらう。ぼくはぼけーつとするあたまのなかでかんがえた。そしてこたえをみつけた。

おにいちゃんのはわざだ！



ぼくはあたまがまっかにあつくなくなった。こんなばかないたずら、おにいちやんしかなない。もしもこれがぼくじゃなくてママたちだったら、どうするつもりだったんだろう。いや、おにいちやんのことだからぼくがまっさきにおふろにいくのをしっていて、わざとさきまわりしてすりかえておいたんだろう。なんてさいていなんだ、これでゆうとうせいなんてよのなかまちがってる。

ぼくはいかりでてがふるえた。そしてすぐにあたまをあらうと、いそいでおふろをでた。もうがまんできない、たとえケンカしてもかてなくて、ぎやくにポロポロにされても、もうかまわない。おにいちやんをいっばつなぐらないと、おなががぼくはつしそうだった。バスタオルをかぶってごしごしからだをふく。

おにいちやんなんで、だいつきらいだ！！

「あれ？」

ぼくのみみに、ふしぎなものがきこえてきた。うただ。でもなんていつてるのかさっぱりわからない。おんなのこのような、あかちゃんのような、へんなこえ。へんなうたがとおくからきこえてくる。だれがうたっているんだろう。

それとたいこやスズ、ふえみたいながつきのおともする。どこかでコンサートでもやっているのかな？

でもそんなことはいまのぼくにはどうでもいい。おにいちやんへのムカムカでいっばいなんだ。シュシュとおんなじにおいにつつまれて、なんだかネコにでもなったきぶんだ。でもネコシャンプーをにんげんがつかって、からだにわるくないかなあ？

ぼくはそんなしんぱいにおそわれた。もしへんなびようきになったら、どうしてくれるんだ。そしたらこんどはもういいのがれできないで、ママやパパはかんかんにおこるだろう。そのときのおにいちやんのかおがみたくってむねがウズウズする。ママにいつつけてやろう。そうしたらやっとおにいちやんのあくじもおわる。



ぼくはまだへんなおんがきがきこえるのもわすれて、さつさときがえてキッチンにむかう。

キッチンにいくと、ママがいなくなっていた。つくりかけのマフィンも、もうオーブンのなかだ。じつくりとやけているのがみえる。どこにいったんだろう。

ぼくはすこしがっかりして、のどがかわいたのでれいぞうこからおちやをだしてのんだ。あつくなくなったからだだがすこしおちつく。すると、またへんなおとがきこえてきた。

にかいから、なにかガチャガチャとものおとがする。おにいちゃんのへやからだ。おにいちゃんのへたクソなうたと、おきにいりのうたがながれている。たぶんおにいちゃんのはたからばこをいじってるんだ。ビーダマやコイン、きれいなし、キーホルダーなんかがちやごちやにはいつている。ぼくにはさわらせなくせに、みせびらかす。とことんいじわるだ。うたのなかみは、まさにおにいちゃんにぴったり。

♪あめあがりはいいろのみち

だれもないぼくだけのせかいさ

クルクルまわしたパラソルの

みずしぶきがキラリ、ひかっている

だれもないぼくだけがしゅやく！

よわむしけむしずぶぬれこねこ

ぼくのあしおとにおどろいてにげたよ

あめがあがればなんてことない♪

おにいちゃんはごきげんらしくて、どうせまたぼくのことをばかにするさくせんでもかんがえているんだろう。でもなんでこんなにはつきりときこえるんだろう。まるでおにいちゃんのへやにいるようだ。みみがよくきこえる。

それだけじゃない、マフィンのやけるおとや、れいぞうこのおと、とけいのおと、せんたくきのうごくおと。そしてふつうならきこえるわけがない、お



となりのおうちのおしゃべりごえまではつきりきこえるんだ！

ママとレティおばさんがおはなししているのがまるきこえ。せけんばなしをしているってはっきりわかる。ぼくのみみはいつたいどうしてしまったんだ！？

「う、ど、どうしよう、きつとあのシャンプーのせいでみみがへんになったんだ！ママに知らせなくっちゃー！」

ぼくはおもいっきりあわててしまい、いちもくさんにげんかんとびだした。うまくくつがはけないまま、おとなりのおうちにはしる。そとはもうあきらしくなっていた。コスモスやきいろいはながにわにさいている。ひまわりはちやいろくかれていた。それもめにはいらなくらい、いそいではしった。おばさんのうちのベルをなんどもならす。するとまゆげをよせたレティおばさんが、おおきなからだをゆすりながらでてくる。おばさんのこうすいのおいはにがてだ。ひっしなかおのぼくをみたおばさんは、びっくりしていった。

「あらハルちゃん、どうしたの？ママにようかい？」

ぼくはいきをきらしながら、とりあえずなかに入れてもらった。ママはリビングでのんびりとくつろいでいる。ぼくのかおをみて、あつけにとられたようにしている。

「なに、どうしたの。そんなしにそうなかおをして」

「マ、ママー。ぼくのみみがへんなんだよ！なんかいつもよりいろんなものがきこえるんだ、ふつうじゃきこえないようなもの……」

ぼくはママにとりすがって、ひっしにつたえた。でもママはあきれたかおで、ぼくのをにぎった。

「はいはい、おちついて。きのうみみそうじしたからでしょう。それにいろいろってなによ」

「だから、ママとおばさんのはなしごえもきこえたんだ。おにいちやんがかいでうたつてるのも、とにかくいろいろー！」

「はあ？きのせいよ。おとなりなんだからきこえるわ。おにいちやんはベんきょううちゅうなんだから、じやましちやだめよ。おそとであそんできなさ



い」

そういうと、ぼくにクッキーをにさんまいわたしてかえるようにいう。おばさんのおしやべりをはじめた。ぼくはもうとりあってももらえないとわかったので、トボトボとおばさんのうちをあとにした。ママはおにいちゃんのことをしんじすぎている。わるいまほうにでもかけられているんじゃないかな。

ぼくはどうしようもなく、ぶらぶらとそのへんをさんぼした。そらはうすいあお。クッキーをたべながらあるく。おいしい。とんぼがなんびきかたんでいる。あおむしのなきごえがいつもよりおおきくきこえる。うるさくはないけどいまのぼくのこんらんしたきもちにはじやまなだけだ。ぼくはなるべくしずかなところに行くことにした。つらいときやかなしいときに行く、あのばしよに。

ふときづくと、さつききこえていたみようなおんがくが、またはつきりときこえてきた。こんどはすぐちかくからきこえる。にんげんのこえとはどこかちがう、きのぬけたこえ。それがなんしゆるいもあつて、やつぱりがっきのおともするんだ。だれがうたってるんだろう。ぼくはおとのするほうへあるいていく。

そっちはぼくのだいすきなあきちがあるほうだった。ぼくはむなさわぎがして、しんぞうがドキドキしだした。なにか、ふしぎなことがおこるようなよかん。

たとえばあめあがりにもらににじがかかる、そんなきぶん。

ぼくはいつのまにかえがおになっていた。

「.....うそ」

ぼくはこおったようにかたまってしまった。ゆめじやないかとおもう。いまめのまえにおこっているできごとが、とてもほんとうのこととはしんじられないきぶんだ。

ネコのおんがくたいが、あきちにずらつとならんでいたんだ。

じゅっぴきくらいいろいろなネコが、がっしよのたいけいにならんでい



て、そのわきでまたじゅつぴきくらいのねこが、きとかいし、バケツをてやぼうでたたいている。ふえのおとはくさぶえだったらしい。さんびきがくさをくちにあてている。でもどのネコもにんげんみたいにたっていて、えがおだったりすましがおをうかべている。

ぼくはあぜんとしてそのようすを、きのかげからみつめていた。ゆめでもみているのかとおもう。けどちやんとみえるしきこえる。ネコのうたがあたりにあかるくひびいているんだ。こわいような、ドキドキするような、ふしぎなきぶん。こんなのをみたのはうまれてはじめてだし、せかいじゅうでぼくだけだろう。ネコたちはみんなリズムにのって、とてもたのしそうにえんそうしている。なんだかぼくまでおどりだしたくなっちゃう。

そうしてしばらく、ぼくはじべたにすわりながら、ゆかいなネコのおんがくたいのえんそうをきいていた。

ふとめをあけると、えんそうはおわっていてあたりがしずかになっていた。ぼくはねむたかったのですがすぐにはきづかなかったけれど、いつのまにかひろばからはネコたちのすがたがきえていた。あんなにたくさんいたのに、どこにいつてしまったんだろう？ ぼくはあわててたちあがり、ひろばにはいつていった。しずかになったひろばにはネコのこいつびきいない。まさかゆめだったのかな……。

ガサツとはやしのおくでおとがした。ふりむくとそこにはぎんぱつのおとこのこがたっている。ぼくよりすこしおおきくらいで、おにいちやんとおなにどしかもしれない。きょうのそらのようにすんだあおいめと、むねについているきんいろのスズがめだった。ぼくはなんだかしているようなきがして、でもだれだかおもいだせなかった。おとこのこはゆっくりちかづいてくるとぼくにはなしかけた。

「ねえ、きみにおにいちやんがいるだろう」

「え、いるけど……どうして知っているの」

「いいことおしえてあげる。きみのおにいちやんがね、きみのママのスカーフをボロボロにきざんじやったんだ。それはおにいちやんのたからばこのなかだよ」



「どうしてわかるの？ きみは・・・だれだい」

けれどおとこのこはなにもいわないですこしわらって、ものすごいはやさではやしのなかにきえていってしまった。ぼくはむねがドキドキしている。おとこのこのいなくなったあとに、ぼくのよく知っているにおいがしたんだ。あまい、リンゴのにおい。

ぼくはゆうひがやまにかくれるころになって、ようやくうちにたどりついた。ママはもうかえっていておやつのマフィンもやけていた。ぼくのかえりがおそいともんくをいって、でもにっこりわらってあたまをなでてくれた。なんだかそれだけでぼくは、おにいちやんにされたこともゆるせちやうきぶんだった。そしてなによりおにいちやんをぎやふんといわせるヒミツをしっているのだから。

「ねえママ、ぼくみちやっただけど・・・」

ぼくがいうと、ママはオニのようなかおになってにかいヘドスドスあがっていった。ぼくはごきげんでおやつのマフィンとミルクティをたべていた。にかいからはおにいちやんのなさけないこえとママのこわいどなりごえがする。これでやっとうんとうのわるものがこらしめられたんだ。ぼくはまるでたんじようびをむかえたみたいにうれしかった。

いつのまにかみみはいつものようにもどっていた。やっぱりきのせいだったのかな。シュシュがそとからのんびりとかえってくる。いつものようにすましたかお。ぼくのひぎにのっかると、おやつをねだった。マフィンをひとかけあげて、のどをなでるとゴロゴロならす。せなかにはっぱやどろがついていた。ずいぶんたのしくあそんできたみたい。

「よこれちやっただね、シュシュ。からだあらってあげよう」

シュシュはいやそうにぼくをにらむ。ネコはシャンプーがきらいらしい。うつすらと、リンゴとマフィンのいいにおい。